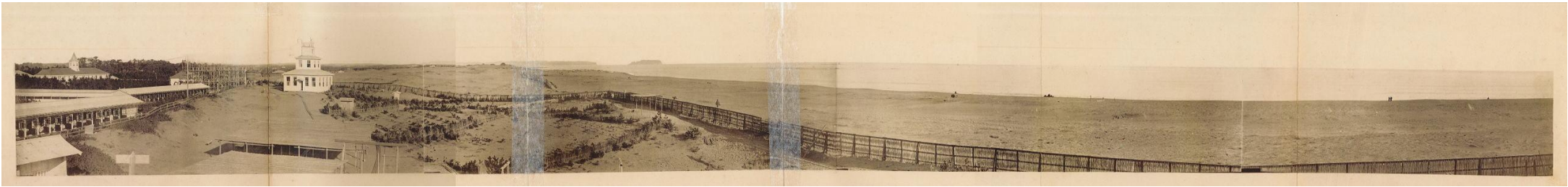


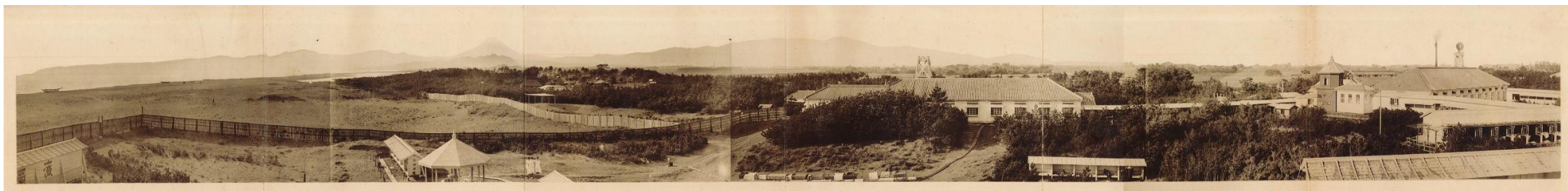
院湖南

Nankoin

1913







勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ寧々服膺シテ成其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月二十日

御名 御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ
彼此相濟シ以テ其福利ヲ共ニス朕ハ愛ニ益國交
ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其慶ニ賴ラム
コトヲ期ス願ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠
澤ヲ共ニセントスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ
戰後日尙淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一
ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇
厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實に就キ荒怠相誡メ自強息
マサルヘシ

抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史
ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ
淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕
ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ
倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威徳ヲ對揚
センコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セ

御名 御璽

明治四十一年十月十三日

內閣總理大臣副書



高 田 畊 安

湖南院長兼東洋內科醫院長

祈願の歌

あまつおやがみ

さかえませ

みもとにわれを

すまはしめ

みむねこのよに

なしたまへ

われらにいのち

やしなはせ

すぎにしごがは

みなゆるし

せいびをぶじに

ならしめよ

ふくじゆはみなに

つねにあり

これぞわれらが

ねがひなる

(明治四十二年二月十一日 高田晴安題詠)

明治三十年十一月十一日院内庭園ニ於テ撮影

第四列

第三列

第二列

前列右ヨリ

藤田末藏	風間なほ子	増山持正	増山宗正
牧田はつ子			高田輝子
島田巻子	横山節子	岡重正	
石川時二郎	後藤あさ子	院長	
	山本まつ子	阪部のぶ子	高田安正
	山田とし子		増山たけ子
山田宇一郎	三田こさ子	何某	齋藤某子
	甲斐田りよ子	高橋さく子	小原頼之
内田保爾	何某	安西なほ子	増山守正
	蔵田中三		安村政子 及すみ子
本間辰蔵	古賀林太郎	政岡千代野子	大金羊三

會祝念記一第院医科内洋東



南湖院職員

長谷部眞平
坂田晋助

木村富五郎	龜井春吉	小室助次郎	高田 眞	
藤本實吉	菊地シゲ子	杉山平助	高田久五郎	
三留勇次郎	丹羽昇三	白井義賢	高田守正	三次健太郎
高品ユキ子	渡邊妙子	山本 榮	鹽波留吉	
鈴木林藏	長野ソノ子	白井コト子	長谷川英太郎	
岸 キン子	宮岡トメ子	加藤キミ子	三次半之助	
木多トモ子	青木タミ子	木高フミ子	高田重正	三次廣次郎
馬場園トキ子	千場カヨ子	松本タカ子	渡邊 晃	高田 美
杉山イロ子	保坂ツネ子	山中エミ子	岡 健三	
鈴木キヨ子	大場トミエ子	寺澤銀次郎	高橋誠一	
三上フシ子	星野千代野子	川島竹次郎	院 長	高田美正
永井トウ子	吉村夏子	酒井幸吉		
宮城ヨシ子	堀内キン子	安藤義造	高田輝子	
吉井キタ子	林 キヌ子	富木重次郎	河野桃乃子	
伊藤次代子	永田マサ子	伊井寛一郎	土岐ミヤ子	
村田ヲルコ	海保仙之助	酒井傳次郎	岡村 繁	
岡田アサ子	植田角三郎	森島五六	内藤吉作	
櫻井コト子	櫻井文次	佐藤靜江子	大森榮介	
落合鞠枝子				
櫻井 誠				
高田安正	西村文佑			
氏家安平	櫻井ヤエ子			

高田友吉



南 湖 院 職 員

第四列

第三列

第二列

第一列

山本キシ子	須藤カツ子	堀内守麿	堀 昌次
山崎サチ子	高橋マツ子	杉原芳松	秋元 晋
關島シホ子	岡田ミヅ子	飯岡平周	野崎謙太郎
京極フミ子	栗原フク子	内ヶ崎長代子	塚岡玄珠
松本カタ子	岩島セイ子	戸田 麗子	院 長
麻生ステ子	古田矢芳枝子	稲葉勝子	林 止
山田アサ子	平栗ハル子	昆 田 三	駒殿熊野
大貫ツギ子	中澤カツ子	丹澤喜太郎	渡邊壽美子
山本キタ子	島野サツ子	村石長吉	森本仙之輔
	辰尾キヨ子	内堀 幾太	



東洋内科醫院職員

やまご姫

三大州の東洋に
青海原を御裳とし
水底深く堅岩を
颶風狂瀾迫るごも

三千年の古昔より
一系の君と獨立の
皇御意は民に活き
靈氣溢るゝ御委勢

其御首に照る鏡
是ぞ皇祖の御垂訓
萬象明かす智の鏡
清き武勇は草薙の

太陽こそは旌旗標
四海に響く波のごと
静よ臨む父靈
人生御手に救へかし

立たせ給へるやまご姫
青天上に着し給ふ
御足の臺と踏み在れば
太平基搖がじな

我現時代を連ねたる
民は世界に類例なし
民の命は皇に住み
榮光優れしやまご姫

御胸に玉璽腰に劔
智仁勇をぞ傳ふなる
仁慈を盟ふ玉璽
劔と與に備へあり

衆生に母の姫なれば
萬歳祝ふ聲高し
最も愛甚きやまご姫
いえすくりすと侶なれば



正守山増

子竹山増



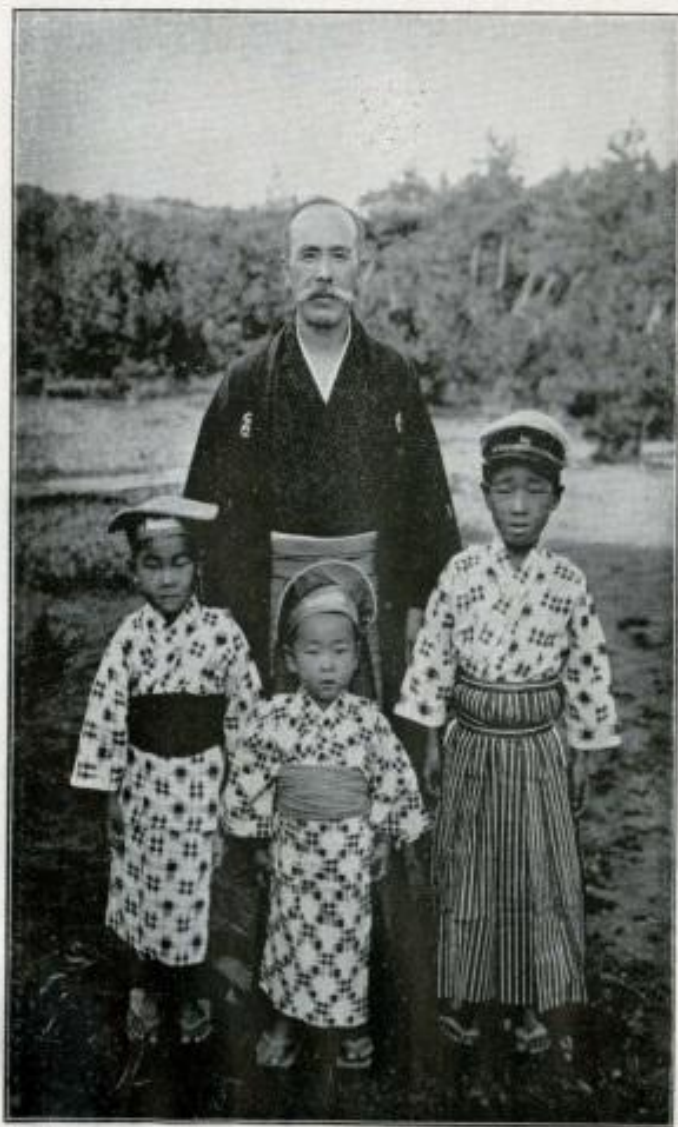
道正山増



正宗山増 子けた山増



正安同 子輝田高 子孝田正 子代伊同 子吉勝



(本日ソメザト教監督) 一 本多 庸
高田善 高田正美 高田真



勝 海 舟

吾^{われ} 彼^{かれ} 敬^{うやま} 米^べ 人^{じん} 師^し

名譽教師ベールツ博士
弟^{てい}の情^{じやう}ぞ美^{うつく}
種^{しゆ}の國^{くに}の隔^{へだて}なし
師^しの在^ありし頃^{ころ}吾^{われ}らしき
ひつつゝも親^{した}しみし
病^{やまひ}ゆゑに逝^ゆきし
は甚^{いた}く悲^{かな}し
く

悲^{かな}き親^{した}頃^{ころ}吾^{われ}なし

めししみ吾^{われ}なし

り今^{いま}しらしき



南湖院の歌

(明治四十一年六月 高田時安詠)

第一 基礎の部

大御心を心とし
世界の人の身と心

其聖愛に基きて
救ふ職務の南湖院

頃は明治の三十一年
相摸の國の海邊なる

二十世紀の三年前
茅ヶ崎村に地を選び

清き砂原數千坪
受けし攝理の奇しき哉

十八歳の松萬株
基礎は深く据えられぬ

清砂示すアブラハム
蒼天の星諸共に

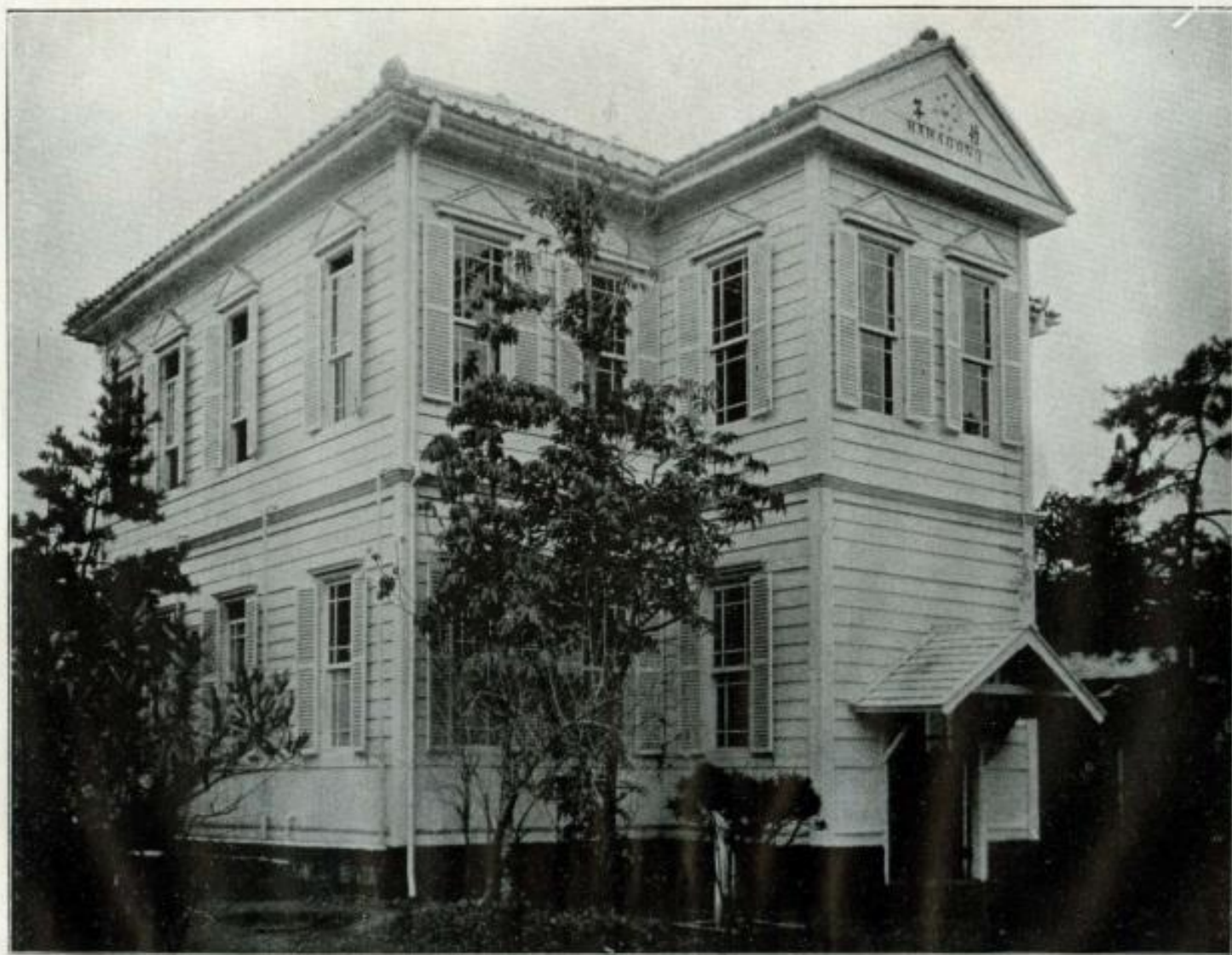
承くる子孫の澤山を
信なる徳の尊さを

砂の清きに根を定め
松の緑の節操こそ

サタンの風を防ぎ立つ
忠なる義士の龜鑑なれ

次年建てし竹子室
靈よ來り宿り在せ

恩愛深き母殿の
其御名永く傳はれよ



室 子 竹



下廊間室正守室子竹



乃 桃 野 河



院

歌 第二

創業の部

醫の嗽に因縁ある
家を造りし岡本の
母名の室ぞ梅の花
清き容姿を現はせる
其秋開けし療養所
三人の病者相共に
中に副長河氏野
薔薇の花の美を守り
其他副長石阪氏
資性を備へ數多く
事務は村山盛義なる
患者に母と慕はれし

三月四日に工起し
鶴は飛び行き高く舞ふ
他の建築に先だちて
芳香を四方に送りつゝ
院の職員打揃ひ
始めて住みし一家族
其名は桃野其人は
病魔を拂ふ勇ましき
其名は蓮子蓮華の
病める人々救ひけり
忠誠無比の丈夫にて
山本松子看護長



室 正 守



守正室內景

院 歌 第三 病室の部

天佑増し、療養具
建坪千に近づきて

汽罐に馬力六十餘
敷地は優に二万坪

ヒマラヤ山の峰よりも
紀念の爲めの大家は

高き御恩の父殿を
守正の名を冠むれり

竹子の室と小一丁
昆虫防ぐ金の網

距て、繼く長廊下
他にも進歩を極めたり

宗正室は愛弟の
數十間の廊下以て

名をぞ留むる病者室
守正室に連りぬ

斜に下る空橋を
敬する兄を憶ひ出で

渡れば到る隔離室
正道室と名づけたり

遙か南の高砂に
オツオンに富る清良氣

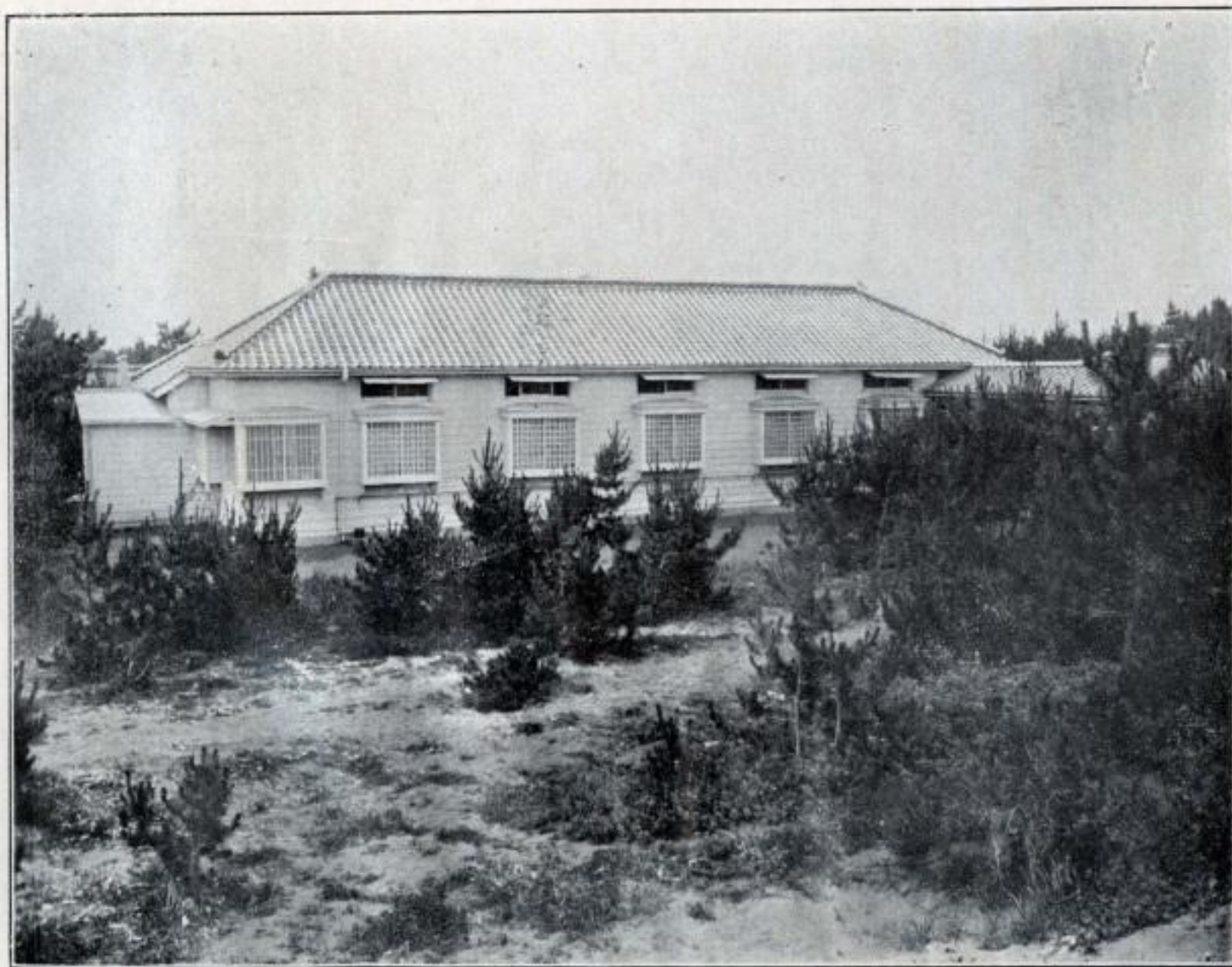
立ち列べるは海氣室
呼吸し瞰下す青き海



員所及所候側
助之才村中 新井大 助平山杉 リヨ右



下廊ノ間室正宗室正守



正 道 室 外 景



下廊内室道正

院歌第四 眺望の部

相摸の灘は池の如
右と左は伊豆相摸

其全景を顯はして
左手遙に安房も見ゆ

冬暖むる黒潮の
煙の白き立ち上り

出で入る口の大嶋
噴火の山を覺らしむ

人に好かるゝ江の島は
之に列ぶは姥島や

灘の東に降り立ち
平嶋と呼ぶ小島群

淺海の黒き平島の
老女の腰を屈む如

南東に白き烏帽子岩
烏帽子の立てる如くなり

西の方なる山脈は
函嶺の山や富士の山

伊豆半島に始めて
北大山に連れり

關の東西會ふ坂の
北に巍峩たる大山に

函嶺聳ゆる双子山
威ある一峰天を指す

院 歌 第五

富士の部

ああ富士山不二の山
表せん爲めに生ぜし乎

日本の國と日本人
聖美の常盤に輝くを

周圍へ遠く擴りて
正なる峯の高潔さ

麓に博き愛示し
是ぞ勝優の祭壇

紅き炎を噴きし頃
岩さへ熔きて迸らせり

叫びて大地震はしめ
ヴェズフの山の荒ぶ如

威嚴畏き律法なる
真理と恩寵齋し

モーゼの時代今や超え
受膏エス君影住めり

此上なき純白の雪衣
太陽常に照り在せば

叢雲時に圍むとも
不二てふ愛兒匂ふなれ

實に神の國神の子を
愛せや聖國聖意を

表す山ぞ諭し告ぐ
信義に立てよ和し行けど

院 歌 第六 南湖の部

富士の麓に美を添ふる
附近の濱の家並は

王城山に高麗神社
大磯町や須賀の村

須賀と院を隔つるは
河口頼に縮まりて

其幅廣き馬人川
南湖の文字を實にせり

馬入を渡る鐵橋を
院の海岸長くして

走る汽車より見渡せば
建物目立つ風車

茅ヶ崎驛に着きぬれば
院へ電話の口開け

出口に對ふ休憩所
其電柱は道案内

徒歩にて行くも半時間
病魔を防ぐ堅城に

經たずに着す南湖院
神と親しむ樂園に

天地水陸美を競ひ
時々新賣の風光

鳥魚蟲花も妙趣添へ
醫治成し賜へ大御神



柳島橋 須賀 王城及富士

(一 其) 室 察 診



婦護看山宮小 者患 員局醫藤安 員醫井酒 員醫邊渡 長副橋高 者患 長院 日田右



診 斷 室 (其 二)

室 射 注



長副野河

員醫岐土

郎護看井永

リロ右

醫 局 及 藥 局 員



吉幸井酒	造義孫安	郎次傳井酒	晃邊渡	耶次重木富	郎一寛井伊	リヨ右列後
子ヤミ岐上	子乃桃野河	長 院		一誠橋高	繁村岡	リヨ右列前

婦 護 看



子エシト場大 子代次藤伊 子クキ井吉 子ヨキ井深 子キト園場馬 子トモ井金 子メト岡富 子ミタ木背 子ヨ右列後
子シヨ城宮 子ヨイ山杉
子マシ田原 子ヨキ木鈴 子ネツ坂保 子ジフ上三 子ンキ岸 子モト多本 子ミフ高木 子ノスマ吹笛 子シヨ崎宮 同列二
子ネ田藤加子代千澤相子メキ林子ンキ内堀子サマ田永子瓦村吉子シイ山宮小子野代千野星子ミス浅湯子ノソ野長 同列前



婦 護 看



子松本山及女兒長院



堂 臥



壺屑紙蓋有及壺痰蓋有



毒 消 瓶 藥
員 局 藥 井 根

課 計 會 局 務 事



三 健 岡 長 課

事 務 局 庶 務 課



中 央 ハ 白 井 庶 務 課 長



ルトラド
主三原萩



ルトラド、カラフ
ブーリ トスリク



ルトラド
ブーリ トスリク



助榮森大
(るせ勤精間年三十)
人老の歳六十七



三健岡
(長課計會)



治善澤水



郎太安谷細
(等道水房暖罐汽の院本)
督監事工設建及計設の
人仁るたれらせ附寄を



伊藤 藤之助
(茅ヶ崎町長)



栗林 慶治
(慈善家)



第 一 醫 局

久^こ天^あ潔^きう 神^{かみ}萬^{よろ}病^{びやう}樂^{たの}院^{いん}自^お望^{のぞ}神^{かみ}今^{いま}八^や愛^{あい}南^{なん}
 遠^{しへ}地^{つち}き き は の 魔^まし の 己^{おの}み の や 年^{とし}子^こ湖^こ
 ま 眞^{まこと}を 代^よは き 爲^{ため}名^なて 榮^{さか}天^{あま}の の
 で 最^{いそ}正^{ただ}同^{どう}靈^{みたま}さ 彼^{かれ}園^{その}に と 爲^なせ 光^{あき}空^{そら}月^{つき}中^{なか}院^{いん}
 も も の に を へ の に と は し と に 日^ひ村^{むら}の

中村副長追慕の歌

佑^{たす}近^{ちか}我^{わが}闘^{たか}榮^{さか}統^{しう}身^み寇^{あだ}盡^{つく}之^{これ}愛^{あい}人^{ひと}昇^{のぼ}長^{なが}女^{むすめ}次^{つぎ}
 け け え 治^しを を し を の り を 史^し
 友^{とも}ひ 除^{はら} の 逝^ゆの
 な れ し め れ 爲^{ため}け 避^さ 幸^{さい}在^ま助^すき
 ん ば よ し む す ぞ し り け 行^ゆ福^ふす け ぬ 長^{なが}

(明治四十一年十月十四日高田研安詠)



愛光室落成

更 ^ス 天 ^ス 我 ^ハ 父 ^ノ	汝 ^ニ 内 ^ニ 實 ^ニ 鳴 ^ル	忍 ^ム 眞 ^ニ 已 ^ミ 愛 ^ス	望 ^ム 神 ^ノ 愛 ^ス 竹 ^ノ
に ^ニ の ^ノ が ^ガ 母 ^ノ	は ^ハ の ^ノ に ^ニ 呼 ^ル	び ^ビ 心 ^ミ が ^ガ 子 ^ノ	み ^ミ の ^ノ 光 ^ノ 子 ^ノ
優 ^レ 同 ^ノ の ^ノ	同 ^ノ 女 ^ノ 設 ^ス 大 ^ニ 美 ^ニ	盡 ^ス 込 ^ミ 利 ^ニ 中 ^ノ	し ^シ 榮 ^ス 室 ^ノ 室 ^ノ
れ ^レ 祐 ^ノ 胞 ^ノ 名 ^ノ	史 ^シ 備 ^ヘ な ^ニ し ^シ	せ ^セ め ^メ 名 ^ノ	愛 ^ス 子 ^ノ と ^ト は ^ハ の ^ノ
し ^シ に ^ニ の ^ノ の ^ノ	の ^ノ も ^モ る ^ル き ^キ	し ^シ て ^テ を ^ヲ 村 ^ノ	
家 ^ノ 基 ^ノ 記 ^ノ 建 ^ス	好 ^ク 最 ^ニ 建 ^ス 建 ^ス	君 ^ノ 院 ^ノ 欲 ^ス 女 ^ノ	女 ^ノ 人 ^ノ 生 ^ス 右 ^ノ
と ^ト 念 ^ス 物 ^ノ	記 ^ノ 進 ^ス 物 ^ノ 物 ^ノ	に ^ニ ふ ^フ 史 ^シ	史 ^シ れ ^レ の ^ノ
き ^キ を ^ヲ		の ^ノ こ ^コ	の ^ノ
せ ^セ		な ^ニ	故 ^ノ た ^ニ 手 ^ノ
		そ ^ソ	
よ ^ヨ て ^テ も ^モ も ^モ	念 ^ス み ^ミ よ ^ヨ よ ^ヨ	す ^ス 爲 ^ス く ^ク は ^ハ	に ^ニ 幸 ^ス り ^リ に ^ニ

(明治四十三年十二月二十二日 高田時安詠)

事 務 局 員



平安家氏	助之半次三	郎太英川谷長	郎次竹島川	賢義井白	リヨ右列後
三健岡	子カタ本松	六五泉森	吉留波雄	同列二	
三昇羽丹	子ミエ中山	子トコ井櫻	コルツ田村	子文田岡	佑文村西 誠井櫻
					同列前

炊事部員及使丁



三留勇次郎 坂田吾助 小室助大郎 蓮本寅吉 白井コト子 加藤ミキ子 見上ル子 粟品ユ子 新倉ツタ子 澤澤銀次郎 海保仙之助 植田角三郎 大森榮介 中川ツル子

右列後
 同列二
 同列前



愛光室乙等病室



子園田前



子直野高



子くき山増



之頼原小
(人 仁)



衛兵五野小



造鶴本岡



松勢伊島小



郎次助川小



高橋孝子
(南湖院に出張の科醫)



田中正善



荒川巳三郎
(金原銀頭行取)



荒川玉子
(金原明善夫人)



大澤源太郎



高橋愛太郎
(病院長の敷地を賣渡したる人)



小地菊兵衛
(茅ヶ崎郵便局長)



長谷川長次郎
(病院長の敷地を賣渡したる人)



伊藤 蔵圓



長田 サヲ子



長田 正武



藤岡 善右衛門



加藤 コ子



三橋 源次郎



石黒 保造



井 要助



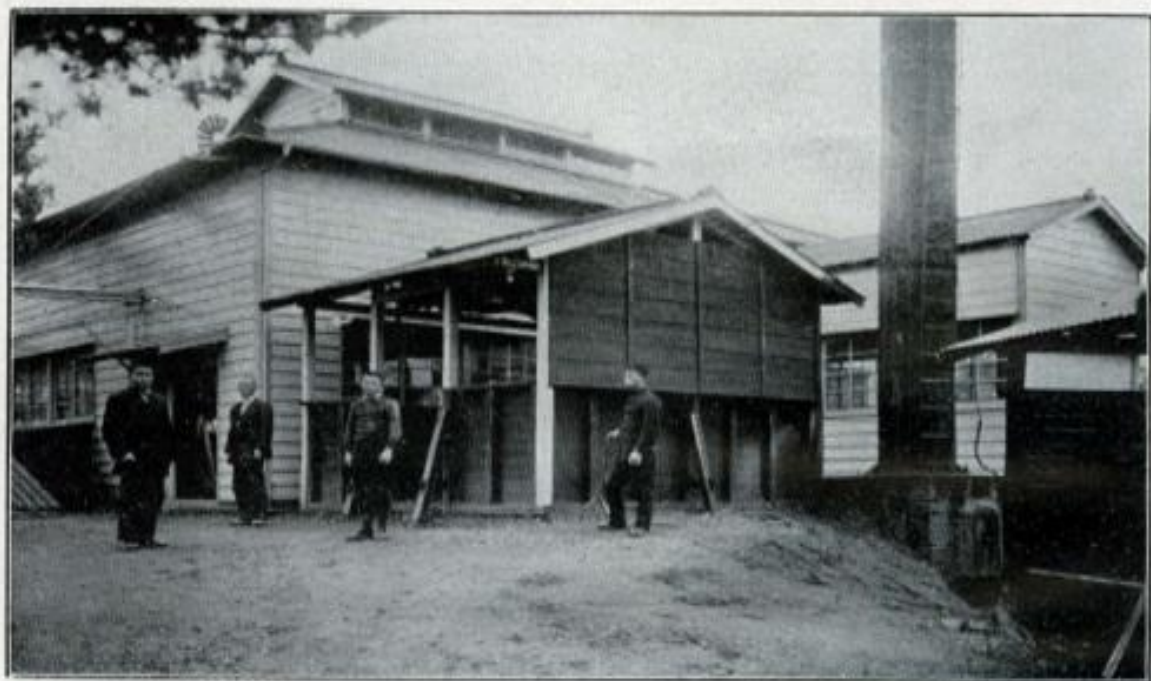
明治四十五年四月七日撮影
 病後二月半記念 退院後數
 日主十八歳九日也 其於此
 高田先生



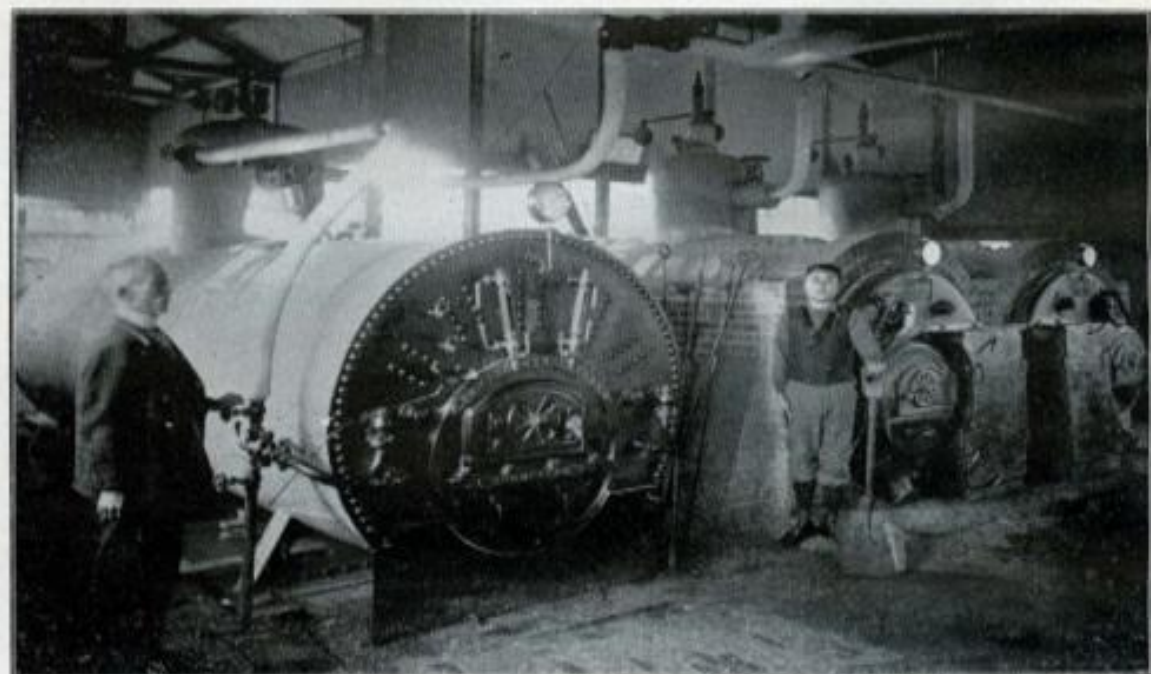
其後病一月半記念
 明治四十四年四月七日 立院中
 作主十七歳 其於此
 高田先生



病後三月三
 明治四十五年四月七日撮影
 病後一月半記念 退院後數
 日主十八歳九日也 其於此
 高田先生



汽 罐 室 外 景



汽 罐 室 內 景

內藤汽罐部長

能條火夫

右



豆 腐 製 造 場



炊 事 場

第一粥用第二第四飯用第五蒸用
第一第一菜煮用又汁用第四飲湯用
每日常平均米八斗三升一斗五升ヲ費セリ

汽 炊 釜



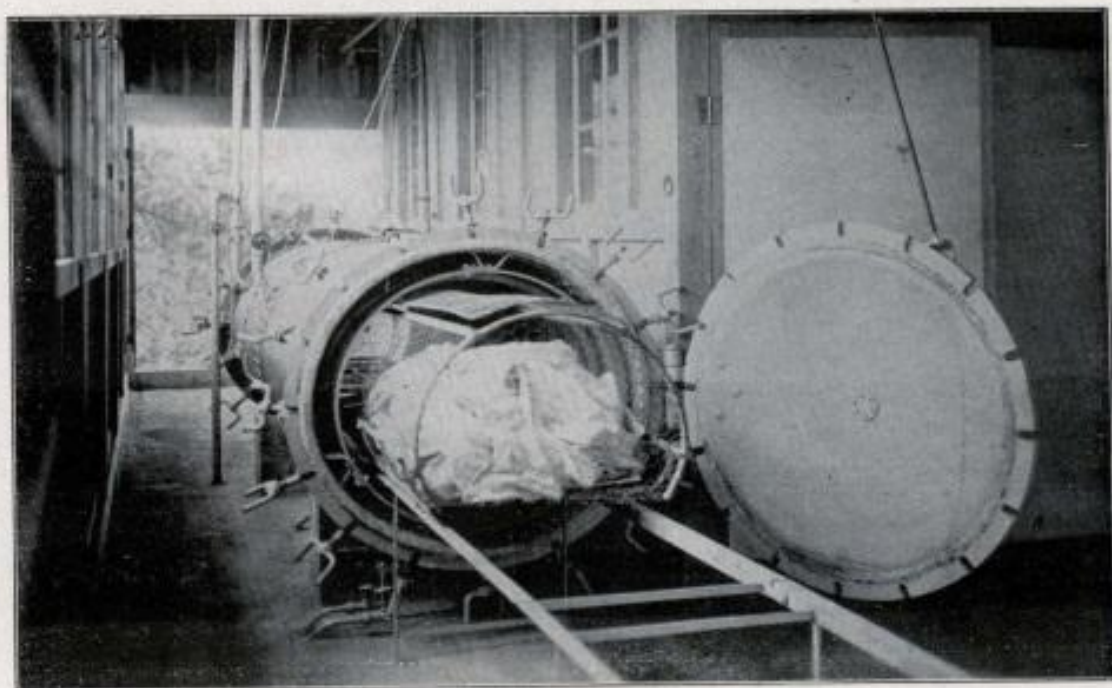
洗 濯 場
洗 濯 主 任 高 田 友 吉



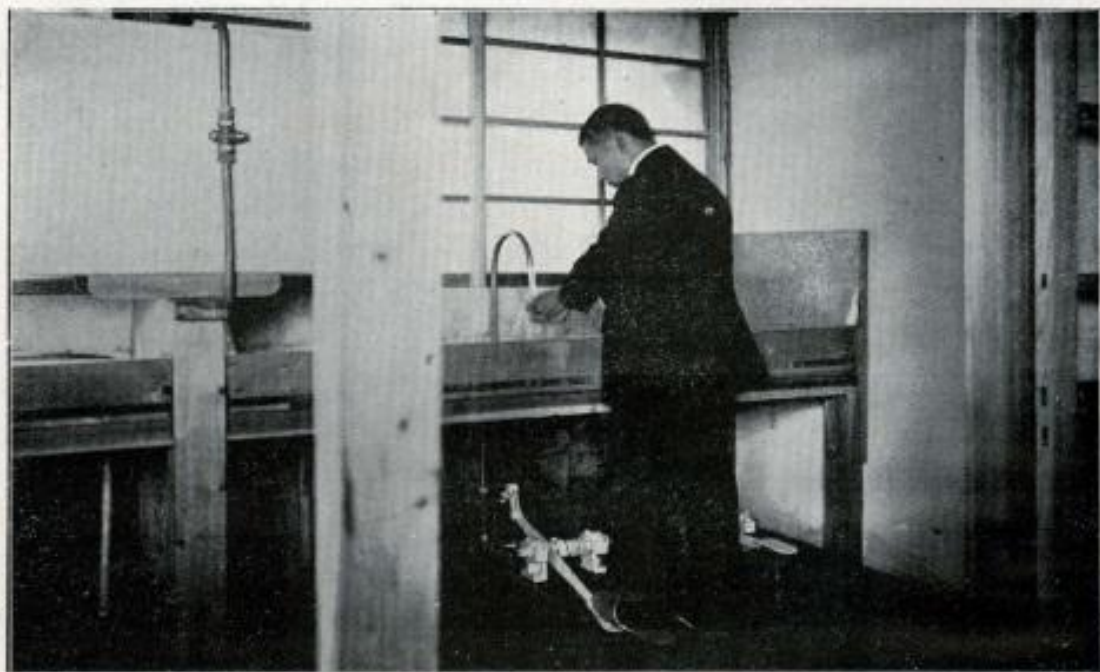
乾 燥 室
吉 村 看 護 婦 室



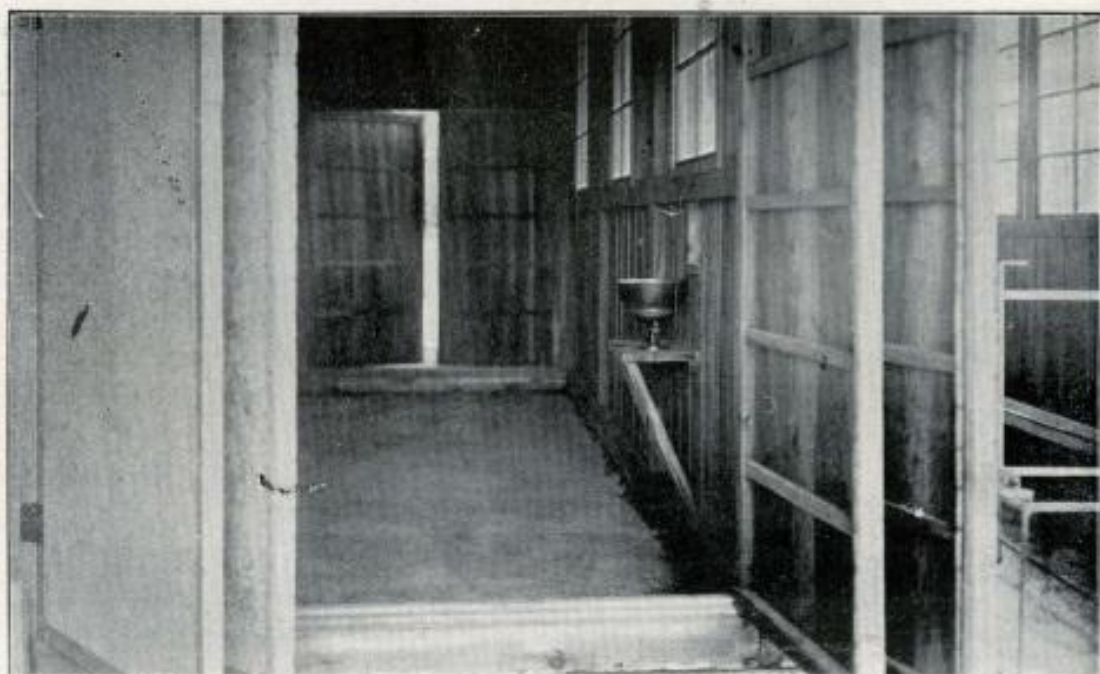
信書ホルマリン消毒器



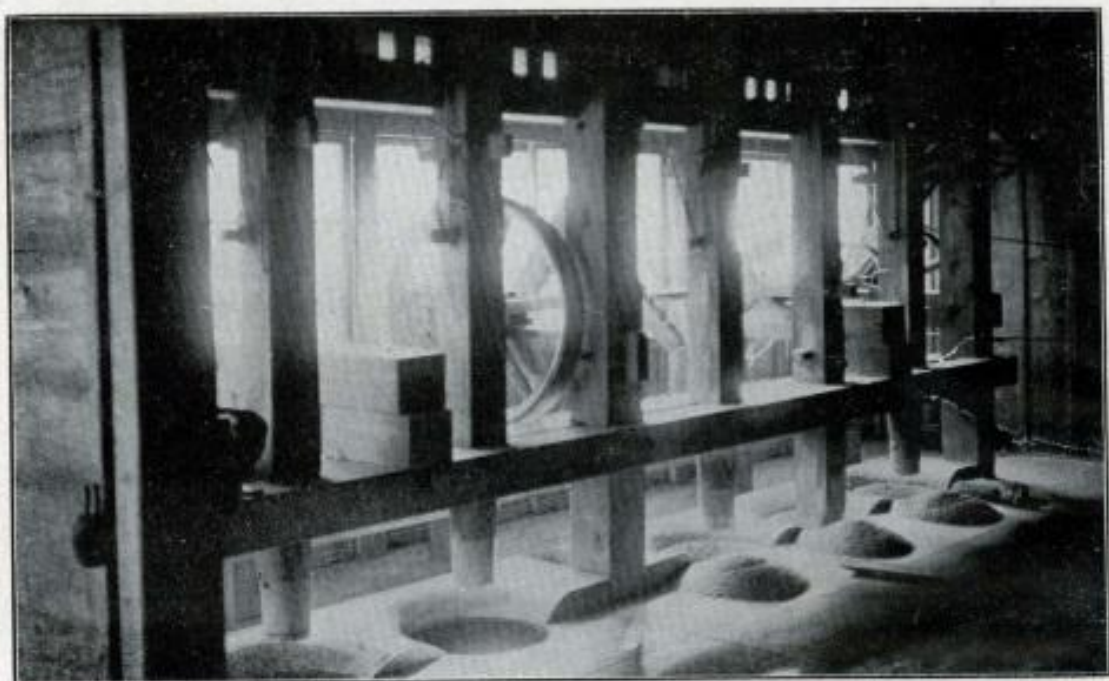
熱汽消毒室



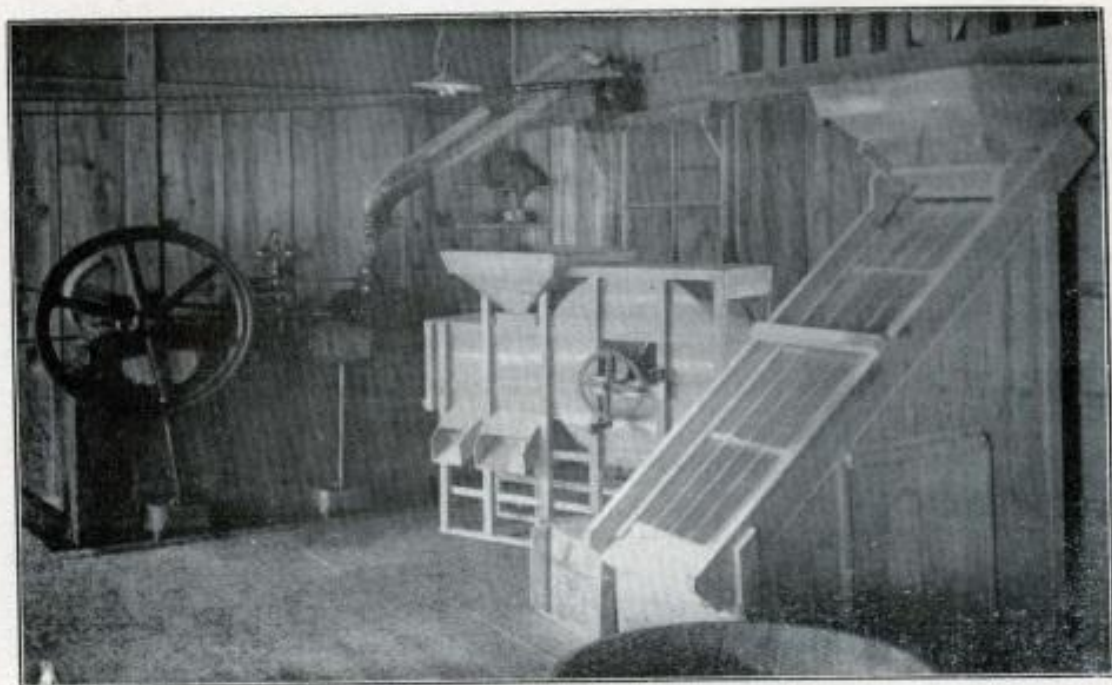
足踏開閉水道口



ホタルリ消毒室



(一 其) 場 米 精



(二 其) 場 米 精



南 湖 院 日 曜 學 校



院 長 一 家



新 宅 (室香蓮)

南湖院卽事

天台道士

奇岩拔波立

其狀最堪看

疑是霸師冠

今猶海上殘

（霸師指大江廣元）

焰々連漁火

煙波幾里程

正知多所獲

遙聽放歌聲

仰望富峰雪

俯觀東海瀾

俯仰青兼白

春風兩樣寒

凝眸遠南望

大嶋眼中橫

欲問八郎跡

水雲鎖海程

幾千魚潑刺

一網網羅來

漁夫喜無限

相集爲含杯



杉浦重剛
(教育家)



樞密顧問官
男 九條 隆一
(美術大家)

南湖院卽事

天台道士

青松掩砂路

農圃接漁家

病夫無一事

乘暖訪梅花

緩步又低徊

徐行野水隈

田家何處見

竹外一枝梅

松林掩茅屋

屋外戲兒童

曝網且鋤圃

漁翁卽老農

水涯多酒樓

萬客試豪遊

此島稱蓬島

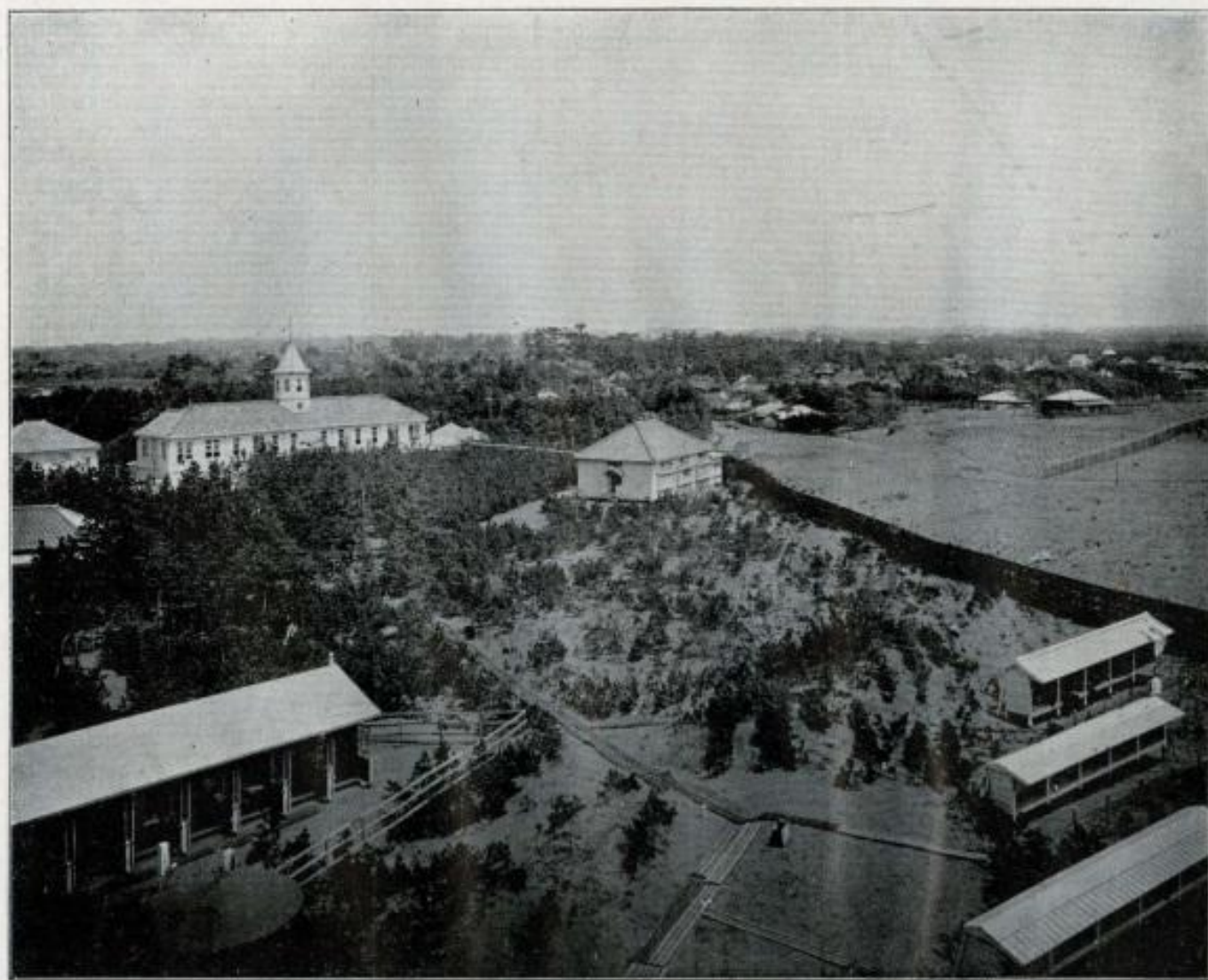
神仙果住不

一帶青松路

導吾大厦濱

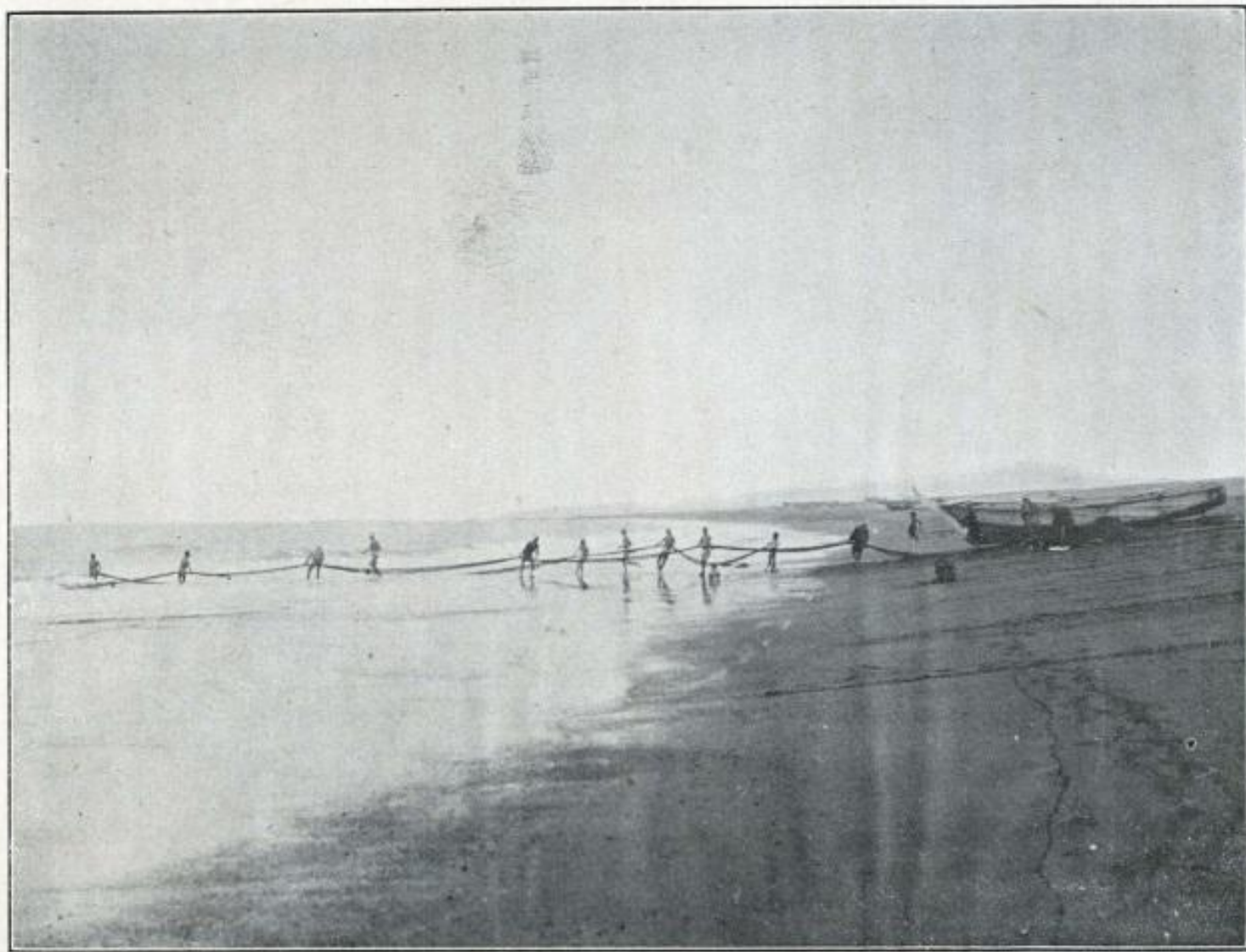
卽是南湖院

仁人濟此民



ム望ヲ方北東リヨ所候測

余嘗て國手高田明安君經營にかゝる相州茅ヶ崎病院に一泊して旭日の登るを見し事があつた。夏日の朝涼しき濱風に吹かれつゝ茅ヶ崎の小高き丘に立ち東方を眺むれば恰もよし旭光將に淡墨色の遠き山蔭より顯れ出んとする所である。實に其光景は何とも云ひ様がない。殊に濱邊の白砂と磯打る波の麗しさ。海は近く島帽子岩の奇巖と江の島とが見え。丘の一面は緑濃き生々たる小松原際涯もなく打續いて居る。今や我れ自然美の聖殿に立てるが如く感じた。時に東方の天に現はれし旭日は次第／＼に登り來りやがて淡墨色の遠山の上に高く輝けるその勢實に旺なものであつた。此の莊觀此の美觀の間に立てる我は思はずも靈妙なる神を感じてその心動き自己を忘れて嗚呼大なる神と叫びて祈禱を捧げた。此時我が心は神を見たと思ひ感じた。此感は實に強きものであつた我は實際神の前にありその榮光を見たりと感興さした。其後今日に至るまで余は此の靈覺を回顧して幾度も冷靜なる批評を加へて見たが。而かも其時見たる物象の我が目に映りし外に一種の靈感我が心を打たるは打消すことの出來の事實である。此の靈感こそ是れ我が神を感じしたる實驗である。



茅ヶ崎海濱引網



金 原 明 善
(忠良なる臣民の範)



法學博士 平岡東助
(國士)

大洪水の讚美歌（譜、今様）

總て此世の
 天つ聖神の
 永世に生か
 愛の業に
 出來事
 吾々をは
 しめんと
 他ならす

大地の星が
 土地の球を
 二の世紀の
 日十の紀の
 本は受けぬ
 包み以て
 十の年にし
 バブチスヤ

大雨に次ぐ
 慈悲に次ぐ
 大韓國を
 其歡喜にあ
 如合はた
 何せにぞ
 大歡喜にあ
 如合はた
 何せにぞ
 大雨に次ぐ
 慈悲に次ぐ
 大韓國を
 其歡喜にあ
 如合はた
 何せにぞ

新妻を得し
 樂き旅行を
 共に歩ま
 人共の幸福
 新妻を得し
 樂き旅行を
 共に歩ま
 人共の幸福
 新妻を得し
 樂き旅行を
 共に歩ま
 人共の幸福

時事所感

やまごひめぎみ	いかなれば
うきみすがたに	みえたまふ
せかいにいとも	すぐれたる
あからのいつに	いまさずや
ひとりごさへも	たまふなる
かみはまここに	ましませば
いかなること	みなきみの
さかえごならぬ	あごあらじ

神は我親

(自然の美の語)

神は救 ^す 罪 ^を 誘 ^は	神は愛 ^を 正 ^を 有 ^る	神は死 ^を 核 ^を 敷 ^く	神は所 ^を 幾 ^を 無 ^き	神は聖 ^を 光 ^を 生 ^ず
こは の 惑 ^は	こすし 形 ^を	こせにへ	こ 有 ^る 限 ^り	こ 壽 ^を れ
そる	そるく 無 ^き	そる 盡 ^す	そ に	そ 無 ^き て
我は 荒 ^を の	我は 子 ^を 世 ^を 形 ^を	我は 物 ^を 奇 ^を く	我は 物 ^を 萬 ^を 廣 ^く	我は 究 ^を 靈 ^を 今 ^を
の 道 ^を 波 ^を 風 ^を	の と ば の	の も き ぬ	の を の き	の に は 年 ^を

御は賜 ^を 園 ^を 吹 ^く	御は召 ^を 渡 ^を 美 ^を	御は活 ^を 力 ^を 細 ^く	御は統 ^を 星 ^を 天 ^を	御は在 ^を 育 ^を 四 ^を
親は け	親は び ら を	親は か	親は 治 ^を	親は し
親は り	な 玉 ^を し 備 ^を	し 込 ^を 胞 ^を	の の	ま 十
な と さ	な 玉 ^を し 備 ^を	な む	な め	な た
れ し も み	れ ふ め へ	れ る め の	れ す 群 ^を 原 ^を	れ る り 七

(明治四十一年八月 高田晴安詩)

ウオルヅウオルヅの語に基ける歌（自然の美観）

上

虹見^みる際^{さい}の嬉^{うれ}しき

虹見^みる際^{さい}の嬉^{うれ}しき

幼^おき頃^{ころ}に今^{いま}も尙^{なほ}ほ

老^おいても死^し後^ごも亦^{また}然^{しか}らん

下

小^こ兒^ご成^な人^{ひと}に親^{おや}なれば

祈^{いの}る我^{われ}儕^{はい}の生^いく涯^{はて}り

遇^あふ事^{こと}毎^{まい}に讃^{ほめ}めしめよ

遇^あふ事^{こと}毎^{まい}に讃^{ほめ}めしめよ

（明治四十一年八月五日 高田晴安詩）

智、仁、勇、喜、現ニ神榮ニ

知取ちしきはごりて

中さちをや

送さからふまをも

勇いさみたへ

常つねによろさび

樂たのしみて

神かみのみすがた

現あらはせよ

(明治四十三年七月二十九日 高田晴安誌)

罪（聖書の研究八月號ニ據ル）

罪^罪つみ^みご^ごは^はなに^{なに}の^の

事^事大^大ご^ごな^なる^るか^か

罪^罪つみ^みご^ごは^はか^かみ^みを^を

罪^罪は^はな^なれ^れさ^さり^り

罪^罪お^おや^やに^にそ^そむ^むけ^ける^る

事^事大^大ご^ごぞ^ぞか^かし^し

罪^罪お^おや^やが^がみ^みを^をば^ば

罪^罪た^たま^まひ^ひし^しに^に

救 (聖書之研究八月號ニ據ル)

救すくひはなにの

事ナ。さなる
平か

救すくひはかみに

歸かへり
*きて

親おやにつかふる

事オ。さぞかし

身みをもたまひし

親おやがみに

超脱的奮闘

われこそしんのやまどびど

まことのかみのめづこなれ

たどひあくきのかぜふくも

うれひおそるゝことやある

まごころこめてくにのため

かみのためにとつくすのみ

はまれどごみはたぐちもの

たもちたまへるものぞかし

どこしへたもつごみありて

よろづよいくるひとたらは

あくきやかこみせむるども

そこなひけがすことをえじ

ちものみもどにやすらけく

そなはるみちをたどりゆき

ちからのかぎりたまたかひて

かみのさかえをあらはさむ

大理想

あめよりきたるだよりそう
天大理想

ねんかんしかる三きよう
念感志作用

うちどのこどのかんかくと
感覺

よろづのことをたくらぶる

しんびぜんをばおひもとめ
神鑑全

ちのさがをばあらはして
父性

ちじんゆうなるわがみちを
智仁男

ちしは十じにこのよをば
父世

つらぬくためのわれひとは
吾人

もてるこゝろのいのちなり
心

いしのたゞしきはたらきに
意志

しねんぞしんにかなめなる
思念

えいけんだいのじつをあげ
永謙大

しんびぜんなるひとたため
眞美善

ぎよくきようけんにてらしつゝ
玉鏡劍

どう一なせどのりたまふ

醫王

家 ^{いへ} に	我 ^{われ} が	劣 ^{せう} の	母 ^{はは}	長 ^{なが} し	智 ^ち	幸 ^{さい}	祖 ^そ	心 ^{こころ}	皆 ^{みな}	招 ^{まね}	王 ^{わう}	其 ^{その}	使 ^{つかは}	適 ^{あた}	人 ^{ひと}
居 ^ゐ	日 ^ひ	者 ^{もの}	の	き	勇 ^{ゆう}	福 ^{ふく}	國 ^{くに}	た	の	き	は	命 ^{いのち}	れ	す	の
を		癡 ^ち	慈 ^じ		仁 ^に	り		れ		て	病 ^{やまひ}			降 ^{くだ}	優 ^{ゆう}
造 ^{つく}	本 ^{もと}	者 ^{もの}	愛 ^{あい}	父 ^{ちち}	者 ^{もの}	在 ^あ	人 ^{ひと}	よ	人 ^{ひと}	之 ^{これ}	る	さ	ん	王 ^{わう}	む
り	に	を	の	の	を	る	に	と	に	を	を	へ	爲 ^な	は	を
給 ^{たま}	美 ^{うつく}	抱 ^{かか}	醫 ^い	如 ^{ごと}	賜 ^{たま}	皇 ^{こう}	獨 ^{ひとり}	教 ^{きやう}	幼 ^{わらわ}	愛 ^{あい}	弱 ^{じやく}	與 ^よ	生 ^{せい}	臨 ^{りん}	最 ^{さい}
は		き		か	ま			り			れ	へ	き	在 ^あ	奇 ^き
	し		王 ^{わう}			帝 ^{てい}	立 ^た		兒 ^こ				た	し	
り		興 ^{きやう}		れ	し			給 ^{たま}		る		に	り	け	し
ぬ	き	し	は	ど	て	は	の	ふ	の	み	を	し	し	り	く

(明治四十三年十二月三十日 高田晴安疎)



明治四十年一十月スマ

醫王祭の歌

遠く祖先より
慈愛の心
現はれ成しぬ
最強の力ある

傳はるは和り
大地の和
國地の和
一に魂し

二千年餘年の
變らぬ皇
光榮を保てる
類例は外に

古昔より
獨り立つの
國に人なし
絶えな

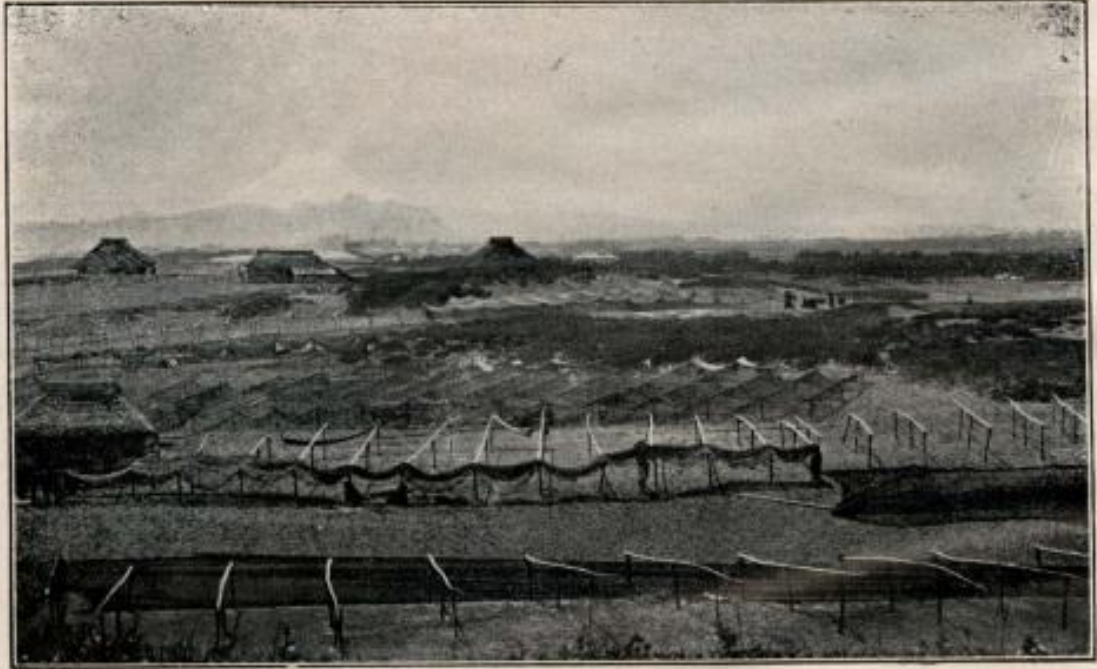
此國の
其靈魂を
醫王は茲に
エスタストは

愛し
衛みらん
臨み
生れけり

昔も今も
變らぬ愛の
感謝の心
吾人の愛せん

後の世にも
父の神に
歌はな
堅盤に

(明治四十三年十二月二十一日 高田時安降)



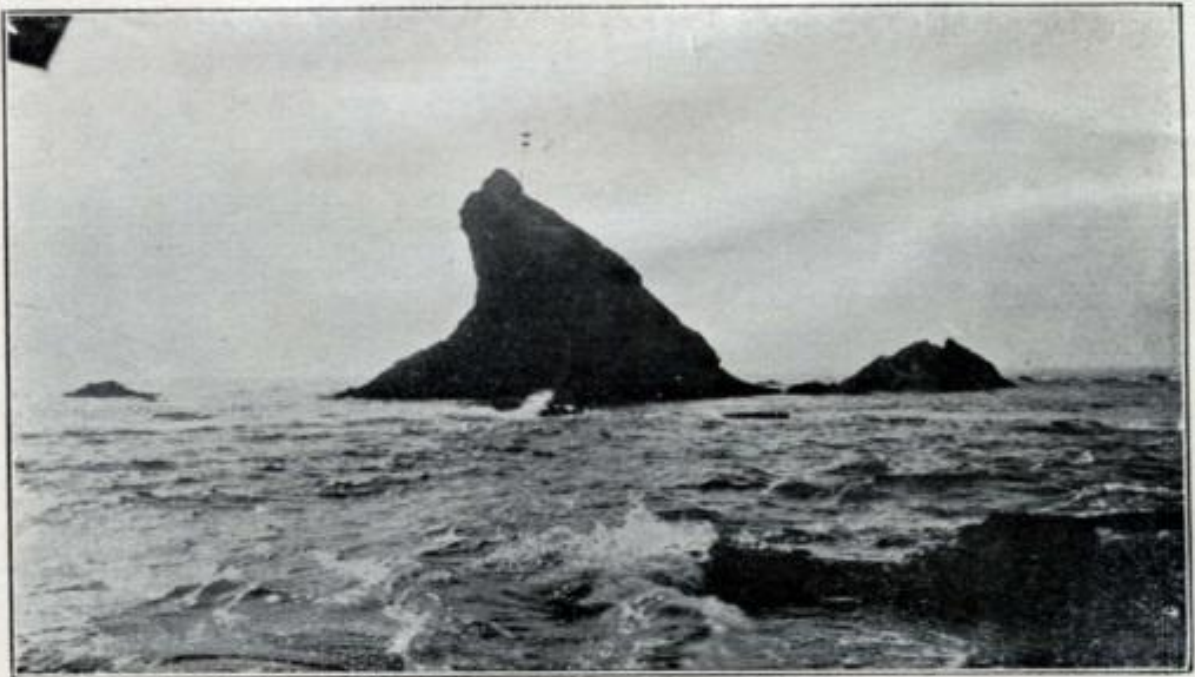
茅ヶ崎海濱ノ漁網



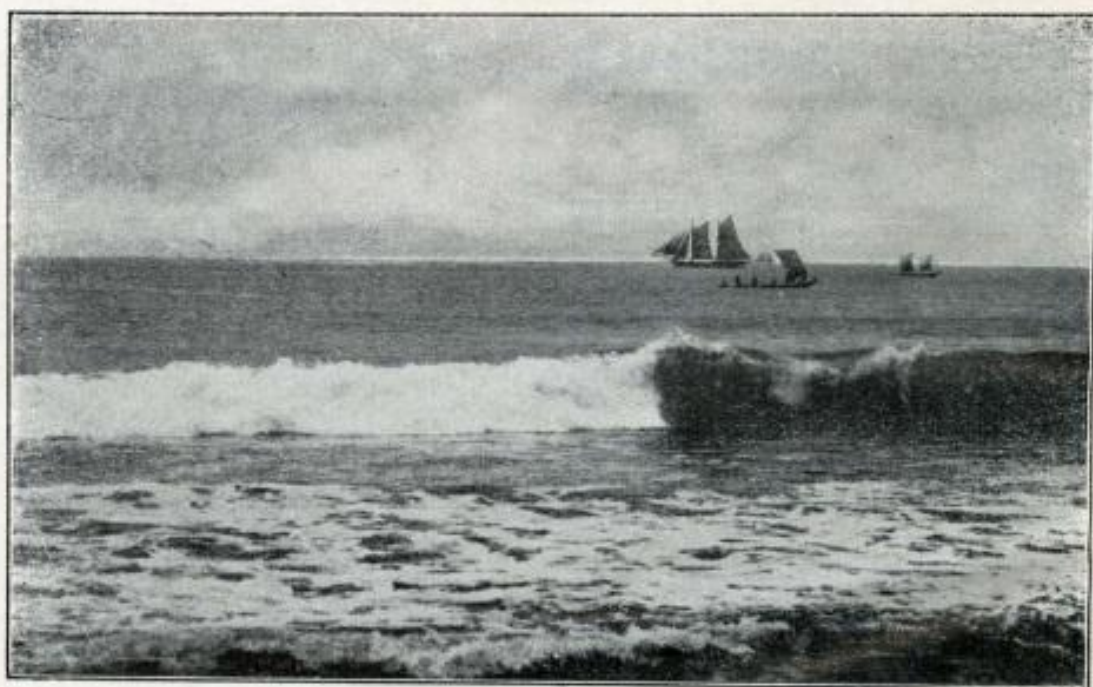
海 水 浴



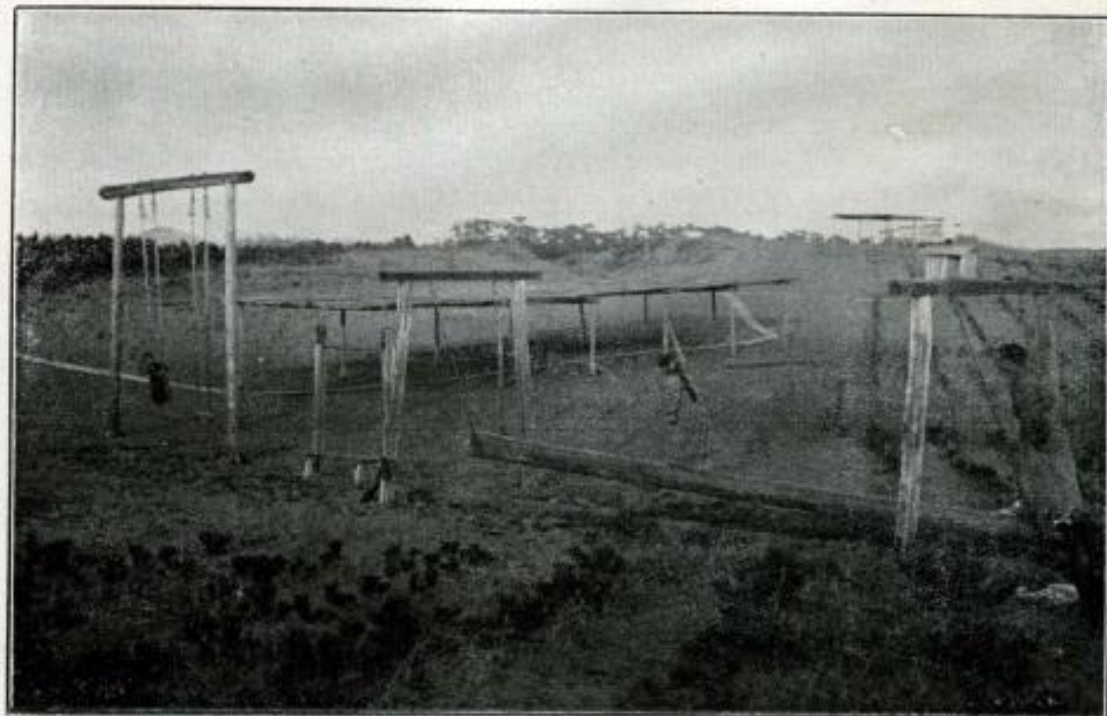
柳 島 ノ 光 景



島 朝 子 岩



濱 海 崎 ケ 茅



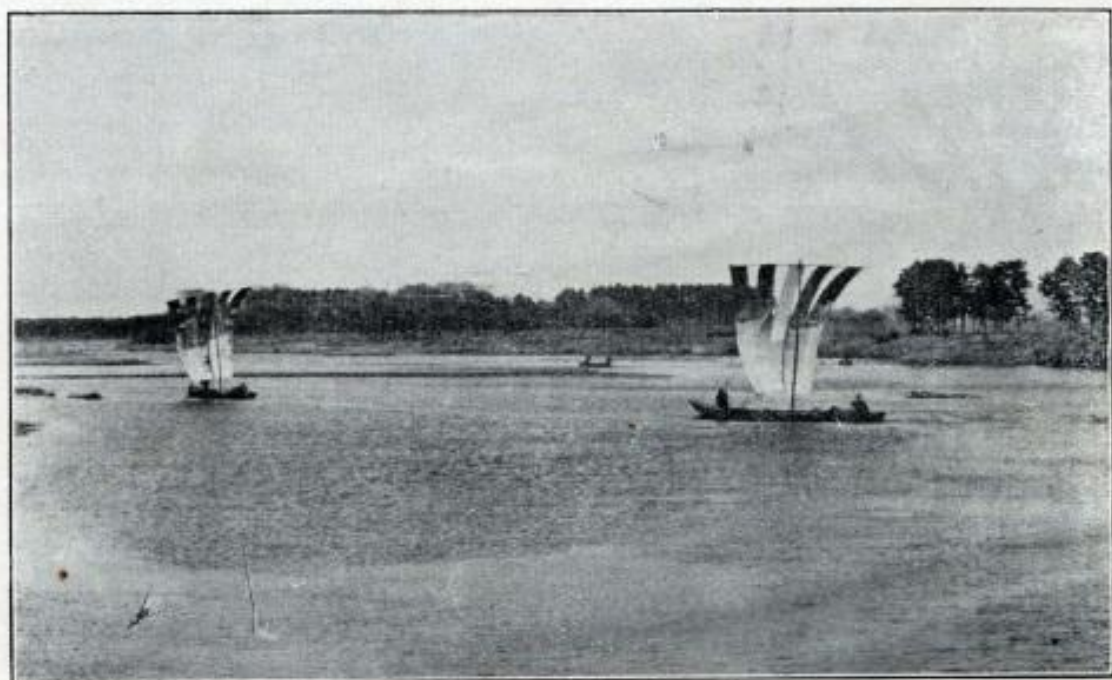
場 動 運 院 湖 市



馬入河口夕景



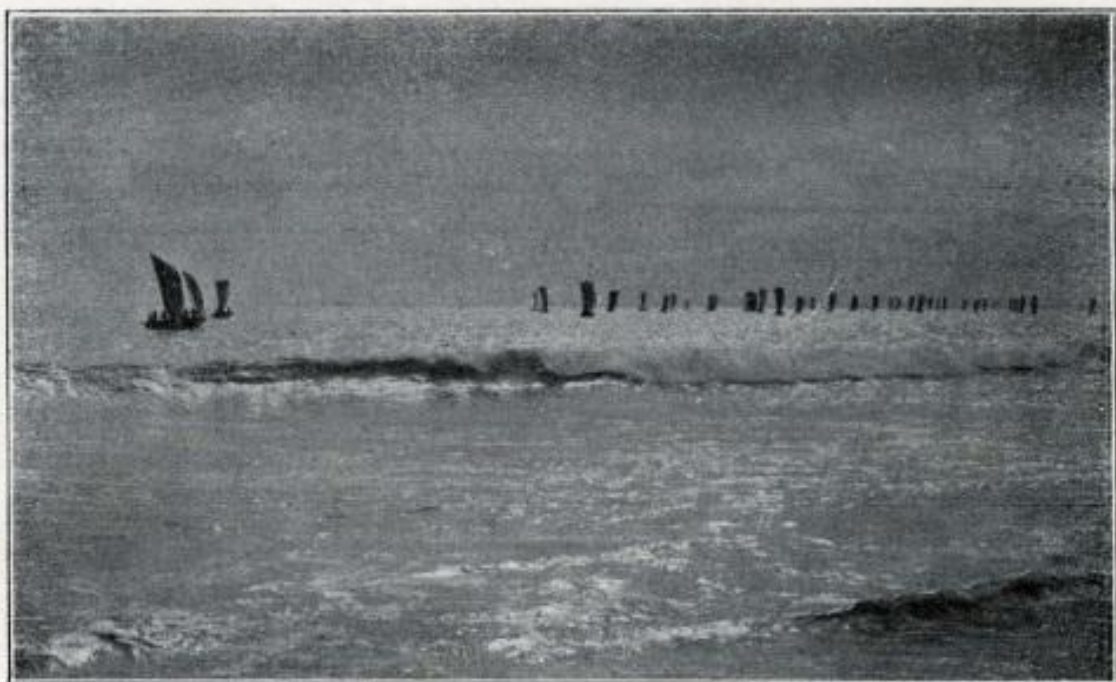
鳥帽子岩雪景



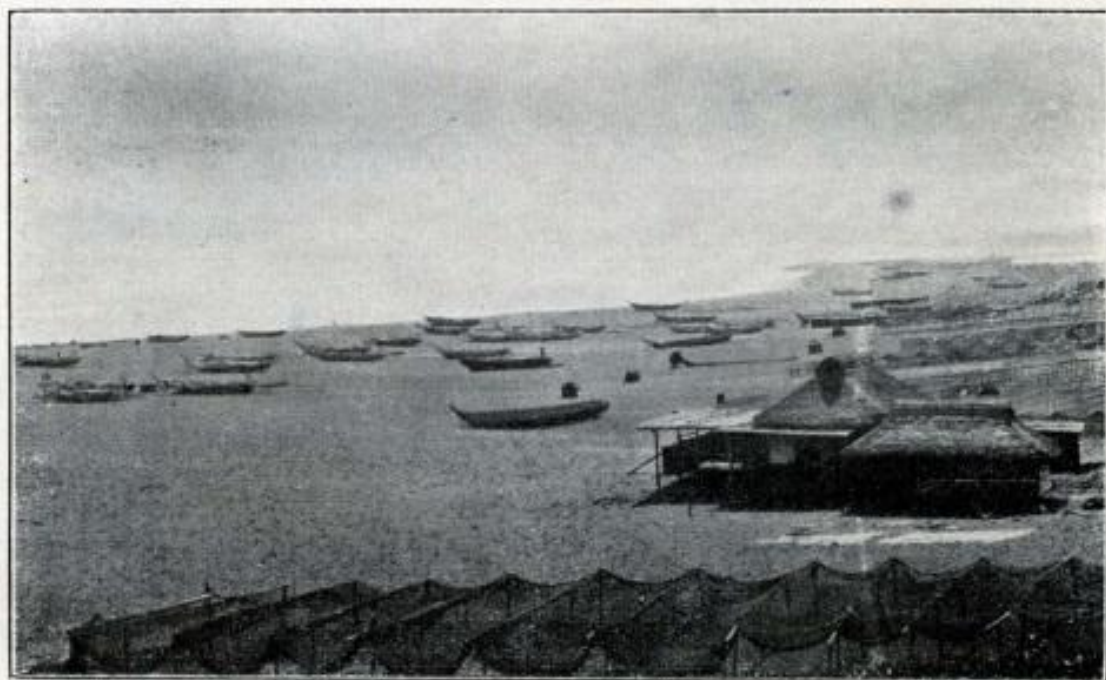
馬入川ノ帆舟



馬入川渡舟



帆出ノ舟漁ヲ曰濱崎ケ茅



舟漁ノ濱海

明治四十二年十二月廿五月初版發行
明治四十三年十二月廿五日再版發行
大正二年十二月二十一日印刷
大正二年十二月二十五日三版發行

(非賣品)

神奈川縣高座郡茅ヶ崎町

字茅ヶ崎南湖一萬二千九百八番地

著作者

高田輝

東京市本所區新小梅町三番地

發行
刷者

秋元 尙 壽

東京市神田區鎌倉町三番地

印刷所

吉田寫眞製版印刷所





